
春夏秋冬

如月凌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春夏秋冬

【コード】

N0056BA

【作者名】

如月凌

【あらすじ】

春の不思議な出会い。それは。

桜舞い散る春。 僕は孤独を感じながら過ごしていた。彼女に出会ったのは、そんなある日の事。

純白の翼の天使。 彼女は人間ではなかった。彼女は唄う。歌は風となり街を吹き抜け、僕を貫いた。彼女は僕に気付くところ言っ

た。
「私が見えるのですか？」

と。
僕にしか見えない彼女。 シャボン玉が青空に浮かんでゆく。彼女は手をのばし虹色が揺れる球体を掴もうとするが 瞬間 弾けてしまう。

触れたくても触れられない。
僕等は互いに シャボン玉のようだと思えた。急速に近づいてゆく僕等は 互いが互いに必要となっていくを感じていた。

梅雨が訪れようとしていた。
続きのない約束。 雨の降る日、僕は彼女に指輪を渡し 約束を交わす。

「夏になったら海に行こう。秋になったら紅葉を。冬になったら…」
言い切る事なく、僕は血を吐き、未来が無いのだということを知るのだった。

「消えてしまわないで…」
病院の白い壁に囲まれた部屋。 僕の手を握りしめていた彼女の手は、冷たく 震えていた。コワイのは僕一人ではない。僕は まだ一人じゃない。

運命を変える代償。 彼女もまた消えかけていた。人の運命を変えてはいけない。彼女が世界に存在する為のきまりごと。そして奇跡を起こせるのは一度だけ。

触れることのない抱擁。　彼女はもう　何にも触れることも出来ないくらいに存在が希薄していた。抱き返したくても僕の体は動かなかった。彼女はゆっくりと　僕に唇を重ね　微笑みをうかべた。
「生きて……」

彼女が僕を擦り抜け　壁を擦り抜け　空へ純白の翼を拡げ飛び立つ。
真夏に降る雪。　続きのない約束　それは共に生きようという誓い。もう　果たされないのだと僕は　窓の外に広がる白銀の世界を眺めながら感じていた。散っているのは彼女の羽根、彼女の生命そのもの。僕の肉体が復元していく。戻っていく。

雪は光となり還っていき、回復してゆく僕の肉体。しかし　消えていく僕の中の彼女の記憶。彼女は言っていたではないか。私の死は　始めから無かった事となるということだと。　嫌だ。駄目だ。僕は病室を飛び出し、外に残る彼女の欠片を抱きしめるように　白い光の羽根を握り締める。握り締めた手の中から泡のように消えていく。僕は叫ぶ。

「これ以上僕から彼女を奪わないでくれ……！」

それから

僕は大学を卒業し　就職し　そこで出会った女性と結婚した。焦がれるような何かはなかったが、理由を聞かれたら……なんとなく、だろうか。男としては最低だろうか。彼女を守りたいという気持ちには偽りはない。それだけはいえる。

娘も産まれ何かが埋まったような気がした。ぎゅっと握る紅葉のような小さな手をゆっくり拡げた僕は息を呑んだ。　コロリと転がる銀色の指輪……不思議と懐かしい。僕はわけもわからずただ、涙した。

『　全てを無くしても……忘れても……それでも　消えない何かがあるのだと、私は信じたい　』

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0056ba/>

春夏秋冬

2011年12月31日01時46分発行